

チャランケ通信 第317号 2020年4月13日

「チャランケ」とは、アイヌ語で談判、論議の意、「アイヌ社会における秩序維持の方法で、集落相互間又は集落内の個人間に、古来の社会秩序に反する行為があった場合、その行為の発見者が違反者に対して行うもの、違反が確定すれば償いなどを行って失われた秩序・状態の回復を図った」(三省堂『大辞林』より)

元参議院議員 峰崎直樹

アメリカ大統領予備選、サンダース上院議員撤退表明へ

アメリカ大統領選挙の民主党予備選挙の決着がついたようだ。4月8日サンダース氏が予備選挙からの撤退を決め、バイデン氏がトランプ大統領との決戦に臨むことになる。この間、バイデン氏が中道派の一本化によって一躍トップに躍り出たわけで、サンダース氏はスーパーチューズデー以降劣勢を強いられていた。そこにきて新型コロナウイルスの感染によって選挙運動自体が難しくなり、サンダース自身が選挙戦からの撤退を決意したようだ。民主党執行部の方たちからすれば、早く予備選挙を終えて政治家としてのキャリアの長い中道派のバイデン氏に一本化し、打倒トランプの先頭に立てたかったわけで、党幹部の方たちはまずはほっと胸をなでおろしているに違いない。

はたして、サンダース支持者たちが、バイデン氏支持へと上手く転換できるのかどうか、大統領選挙戦の行方はその一点にかかってくるかとみてよさそうだ。もっとも、新型コロナウイルス問題の与える経済・社会への影響がどのように展開するのか、本来は景気の遅行指数といわれる雇用統計を見る限りすさまじい失業者の増加が進んでおり、これからの感染の終息時期が見えないだけに、経済は極めて予断を許さない深刻な展開となっている。現職トランプ陣営にとっても、こうした経済的に未曾有な危機の下でどのような施策が打ち出せるのか、引き続きアメリカ大統領選挙の行方に注目していきたい。

アセモグル MIT 教授、サンダース氏を危険な社会主義者と批判へ

少し前の情報になるのだが、ダロン・アセモグル MIT 教授が書かれた『週刊東洋経済』3月28日号の連載コラム「グローバルアイ」で「市場の機能まで奪ってはならない 北欧の福祉モデルとは大違い、サンダースの危険な社会主義」というコラムを読んだ。アセモグル教授は制度派経済学の専門家として世界的に活躍されており、日本でも翻訳書が出されている著名なエコノミストである。世界で一番引用されることの多い経済学者だともいわれている。

「社会民主主義」と「民主社会主義」とでは何が違うのか?!

そのアセモグル教授がこのコラムの中で、アメリカ民主党の大統領候補選挙に立候補していたサンダース氏の批判を繰り広げているのだ。一言でいえば、サンダース氏は民主社会主義者で北欧などの社会民主主義ではない。サンダース氏が依拠している「民主社会主義」は「市場経済を本質的に不公平で、救いがたいシステムとみなす。生産手段の私的所有という根本原理を打ち砕かない限り、変革はなしえないという立場(イデオロギー)だ」とみている。まるでコミュニズムと同じではないかと思われるような批判を展開されているわけだが、この民主社会主義者は「自分たちの社会主義はどこまでも民主的なものであって旧ソ連などとは違う、と力説する」「昨今の米国では民主社会主義と社会民主主義、す

なわち北欧の福祉国家モデルが混同されている」わけで、サンダースもこうした誤解の拡散に一役買っていると批判している。

かつて日本では、日本社会党と民社党と併存していた時代があった

では、欧州の社会民主主義とサンダースの民主社会主義とはどう違うのだろうか。この問いを考えたときには、かつて1960年代から70年代にかけて「日本社会党」と「民社党」が存在していて、ともに社会主義インターに加盟していた「社会民主主義」政党だったことを思い出していた。当時の日本の政治において最大野党であった日本社会党は、1960年の「安保と三池」の大闘争を経て68年「日本における社会主義への道」を策定し、マルクス主義に立脚して市場経済を大きく否定し平和的に社会主義を目指す方向を打ち出していた。この時の日本社会党こそは、アセモグル氏の指摘する「民主社会主義」に近い政党だったといえよう。今になっては、懐かしい思い出ではあるが、これもまた歴史の一齣だったわけだ。

サンダース氏の「市場を乗っ取る」政策は市場経済否定なのか???

アセモグル氏は、社会民主主義は「市場を規制する」が、民主社会主義は「市場を乗っ取る」という違いであると述べておられる。「市場を乗っ取る」という指摘が、現代資本主義の市場経済を国有化して計画経済に転換させるとまでサンダース氏が述べているのかどうか、アメリカでのサンダース陣営の情報をそれほど熟知しているわけではないが、MMT派としてスケルトン教授等がブレイン役として前回選挙にかかわったとされており、であればサンダース氏がコミュニズムに近い言説を打ち出しているとも思えない。2016年に発刊された『バーニー・サンダース自伝』（萩原伸次郎監訳 大月書店刊）を読んだ限りでは、コミュニストとも思えなかったわけで、社会民主主義と民主社会主義の違いはアセモグル氏の指摘するような画然としたものではないと思うのだが、どうなのだろうか。

アセモグル教授、社会民主主義こそが戦後経済を発展させたと評価

コラムの中では北欧の社会民主主義国としてスウェーデンを取り上げ、レーン=メイドナー・モデルを取り上げておられ、「企業を競争にさらす点で、まさに市場経済型のシステムといえる」し、他の北欧諸国で福祉国家政策を推進したのには「中道右派」も含まれ、左派とは限らなかったことも指摘、社会民主主義と民主社会主義は「似て非なるもの」だと断言されている。

このコラムの最後に、戦後の経済発展を支えたのも社会民主主義であり、アメリカのニューディール政策以降の改革だったし、社会民主主義からの逸脱が始まると「雲行きが怪しくなった」わけで、市場原理主義へと右旋回した国では「生産性が停滞し、格差が拡大、社会保障までもがズタズタになった」ことを強調する。結論として、「私たちに求められているのは社会民主主義であって、市場原理主義でも民主社会主義でもない。市場は規制されて当然だが、その機能まで奪ってはならない」とある。まったく、この結論に異存はないのだが、サンダース陣営が打ち出している政策・理念が市場機能を全面否定しているのかどうか、日本にいて情報が少ないためなのだろうか、何かもう一つ納得しにくいコラムだったように思われる。

アメリカ社会では「経済の改革を求める声」が広がり始めている

実は、『週刊東洋経済』と並んで毎日新聞社が発刊している『週刊エコノミスト』の4月7日号において、中岡望東洋英和女学院大学客員教授が「米国に根付く『民主社会主義』サンダース氏劣勢も若者は支持」というコラムを書かれている。このコラムにおいて、中岡氏はミシガン州やコロラド州における予備選挙での出口調査の結果から、米国経済に対して「経済を全面的に改革する必要性がある」と答えた比率がいずれも49%に達したこと、次いで「改革が必要」と答えた比率はミシガン州で39%、コロラド州43%で、実に回答者の8割以上が今のアメリカ資本主義の在り方に疑問を呈している。伝統的にアメリカは「社会主義」を毛嫌いしてきた国だったが、最近では「社会主義」に対する米国人の意識が大きく変わってきていることを昨年5月のギャラップ調査から引用する。社会主義が米国社会にとって好ましいと答えた比率が1942年は25%だったのに対して、19年は43%へと高まっている。さらに、サンダース支持の高かったミレニアル世代といわれる若者層では、社会主義を評価する動きが顕著になっていることをピューリサーチセンター調査で明らかにしている。

アメリカンドリームが消滅、「社会主義」への意識も大きく変化へ

こうした背景には、新自由主義に基づく競争政策によって経済格差が急速に拡大してきたことがあり、特に若者にとってはアメリカンドリームの一つであった”子供の世代は親の世代よりも生活水準が向上する”どころか、賃金の上昇が止まり、大学卒業後の奨学金の返済困難や医療保険制度の不備などへの不満が高まっている。まさに、サンダース氏がそうした不満の声にこたえて大統領選挙に出馬していたわけで、今回の撤退以降もこうした若者の声にどのように答えていけるのか、アメリカ政治にサンダース氏が投げかけた「民主社会主義」の理念・政策をどのように受け止めていけるのか、注目していきたい。

今求められているのは、権威主義的な中国より優れた民主主義的な資本主義社会ではないか

もう一度アセモグル氏のサンダース批判に戻ってみたいのだが、アセモグル氏はスウェーデンなど北欧型の「社会民主主義」には高い評価をしておられるわけで、こうしたサンダースを支持している若者の抱えている不満を「民主社会主義」では何故だめで、「社会民主主義」でなければならないことを、わかりやすく展開してほしいと思う。旧ソ連型の計画経済ではダメだったことは歴史が証明しているわけだが、今の資本主義がアメリカだけではなくEUでも、さらにわが日本においても、成長率が落ちたとはいえ労働分配率を下げつづけ格差社会が蔓延し始めていることへの処方箋こそ求められているのだろう。それは、権威主義的な資本主義大国へと変貌しつつある中国に対抗できる民主主義的な資本主義国家の優位性を打ち出せるかどうか、にかかっているように思われる。新型コロナウイルスの発生源だった中国で、「終息」したとして新たな経済・外交攻勢が強まろうとしている時だけに、アセモグル氏をはじめとする専門家の方たちの真価が問われる時ではないだろうか。もちろん、政治家の責任は大変重いものがある。コロナウイルスの前(BC)と後(AC)で、世界の在り方がどう変えていけるのか、世界の英知が必要になっている時だ。